

巻頭言

1923年の関東大震災・朝鮮人虐殺から100年が経過した。

私に関わっているジェノサイド・奴隷制研究会は数年前から2023年を照準に定めて準備を進め、2023年6月に調布の「せんがわ劇場」で「死者たちの夏2023」と題し3日間、音楽会と朗読会を催した。プロの音楽家と俳優によって、音楽会ではイディッシュソングから朝鮮歌謡、南米の抵抗歌が演奏され、朗読会ではホロコースト、朝鮮人虐殺、カリブ・南米・アフリカの虐殺に関するテキストが朗読された。しかし2023年10月7日以降、イスラエルによってガザ地区で大量殺戮が公然と行われ、改めてジェノサイドが過去の出来事ではないことを思い知らされた。

* * *

ウクライナの女性作家ヴィクトリヤ・アメリカナが、ウクライナのクラマトルスクでミサイルによる攻撃で殺された。短距離弾道ミサイル、9K720「イスカンデル」は重さが4トンを超え、超音速で飛び、最大射程距離は500キロ、命中率は半径5メートル、防衛システムをくぐり抜ける能力があり、1発当たり300万ドル以上の値段がついている。

ミサイルが落下した2023年6月27日の夜7時半ごろ、アメリカナはもちろんピザ・レストラン「リア」に一人でいたわけではなく、その時間、レストランには80人以上の会食客がいて、13人が亡くなり、そこには17歳の女の子、14歳の双子の姉妹も含まれ、61人が怪我をした。

この怪我人の中に、アメリカナと行動を共にしていたコロンビア人の作家やジャーナリストがいて、その一人はスペイン語圏では著名なコロンビア作家エクトル・アバッド・ファシオリンセだった。血まみれの服のエクトル・アバッドの写真がスペイン語圏の新聞に掲載され、ウェブ版で一瞬目に入ったとき、またしても、と思わざるを得なかった。

彼は父親が殺害されている。父親は公衆衛生の専門家として予防の重要性を説いた医師で、貧困の撲滅と公正な社会を求めた活動家でもあった。右派の暴力組織に対して厳しい発言をして脅迫を受けた。彼の殺害とほぼ同じ時期に、3名の有力な政治家や活動家が殺されている。父親との思い出を綴った『*El olvido que seremos* [我ら、忘却される者たち]』は多くの言語に翻訳されて読まれている（日本語には訳されていない）。

来日したときの講演では、大江健三郎の『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』に言及しながら、自分がいかにして暴力を生き延びたかを語った。暴力を生き延びるために書いている、書くことによって狂気が自分の中に居座らないようにしてきた、と。

臆病者を自負するエクトルが、勇敢な父親を追おうとするかのように、ウクライナを支援する運動に参加した。そして再び目の前で、それまで一緒に旅をしていた行動する作家の死を見た。生き延びた彼は、彼女の足跡をたどる文章を書くという。

* * *

リゴベルタ・メンチュウはグアテマラの内戦時、ゲリラ兵になって戦うよりも、国外に出て自分たちの置かれている状況を伝えることを選び、『私の名はリゴベルタ・メンチュウ』を世に送り出した。この本によって、一部にせよ、グアテマラのジェノサイドは知られるようになった。生き延びた人には、証人としての責務が残されている。

総合文化研究所長 久野量一

